

牧歌的で のんびりとした環境で

山崎 洋子



京都府宮津市で生まれ、15歳の時に東京へ。結婚を機に中山へと移り住んだのは、32歳の時だ。現在は、金沢区で暮らす。58歳までの26年間を緑区で過ごしたという。「人生で一番長く住んだ場所ですね。のんびりとしていて牧歌的。静かで落ち着いた環境でした」と当時を振り返った。よく散歩していたというのは恩田川沿い。「土手には、クコの木などがたくさん生えていました。葉っぱを摘ませて頂き、楽しませてもらいましたね」と懐かしむ。そんな執筆に専念できる環境もあってか、1986年、デビュー作の推理小説「花園の迷宮」で推理作家の登竜門である江戸川乱歩賞を受賞。新聞や雑誌の多くの記者たちが取材のために中山の自宅へと駆け付けた。「慌てて、家を片付けました」

と笑った。「近所の人とは良い距離でお付き合いしていました。皆さん、『おめでとう!』と言ってくださって嬉しかったですね」。そんな緑区での懐かしい思い出は今でも多く残っているようだ。

緑区を離れて随分経つので、緑区制50周年記念誌のインタビュー依頼が来たときは、正直驚いたという。それでも、横浜線で中山付近を通る時には、懐かしさからか、窓に張り付くようにして風景を見ているそうだ。「緑区は、その名の通り、緑がとても豊か。豊かな緑を誇りにできる街づくりをこれからも続けて行ってほしい。自然だけでなく、横浜中心地より古い歴史も多くある。ぜひ、後世に残して行ってほしい。緑区制50周年、本当におめでとうございます」とメッセージを送った。



プロフィール

やまざき ようこ

1947年8月6日生まれ。京都府出身。コピーライター、脚本家を経て、小説家に。1986年、『花園の迷宮』で第32回江戸川乱歩賞を受賞。1999年には、初のノンフィクション『天使はブルースを歌う』を刊行。2010年、NHK地域放送文化賞を受賞。2019年5月には、『女たちのアンダーグラウンド 戦後横浜の光と闇』を上梓するなど執筆活動を続けている。